

いちご病害虫情報第12号(総集編)

＜令和5(2023)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、やや高温で降水量が多く推移し、うどんこ病やハダニ類の発生が散見されましたが、炭疽病、萎黄病の発生は比較的少なく病害虫は全般にやや少ない発生でした。本ぼにおいても病害虫は、やや少ない～平年並の発生で推移しました。ハダニ類は天敵利用や定植前の高濃度炭酸ガス処理の普及により、ほ場被害が減少傾向にあります。

1 炭疽病

＜発生状況＞

全体的にやや少ない～平年並の発生で推移しましたが6月に一部ほ場で散見されました。年明け以降は、発病株の処分漏れや潜在感染株の発症により、ほ場率がやや高くなりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょ。発生前から予防的な薬剤散布を行うとともに、発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封し処分しましょう。

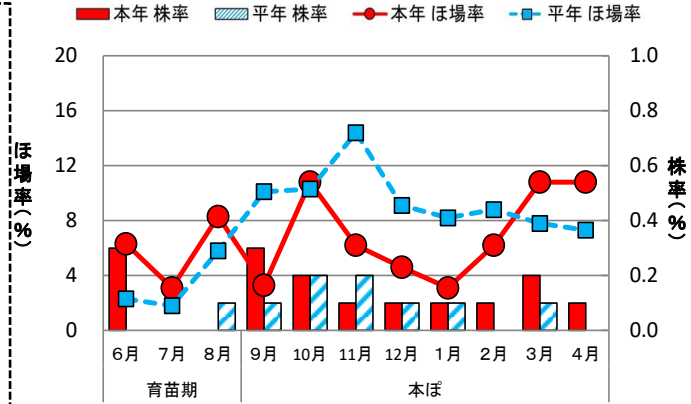


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

全体的に平年より少ない発生でしたが、3月には一部ほ場で発生が見られました。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で4～5年以上生存するため、本ぼで発生が見られたほ場では土壤消毒を適切に行いましょう。

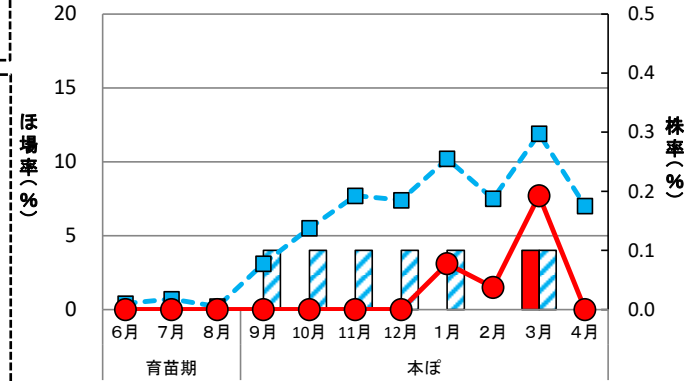


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に、少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましょう。

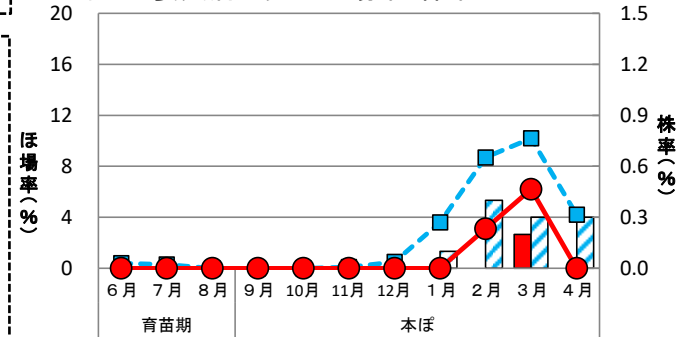


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

年内はやや少ない発生で推移しましたが、年明け以降は一部ほ場において平年よりやや多い発生となりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

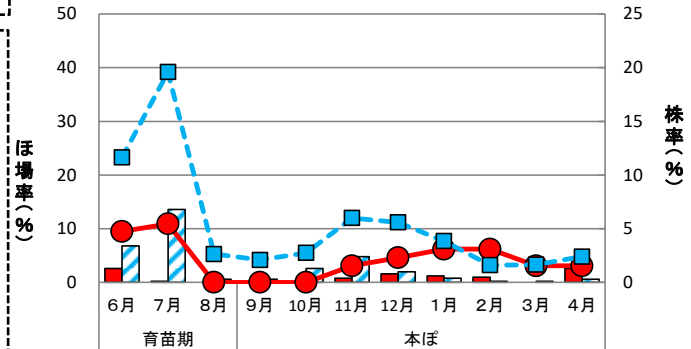


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

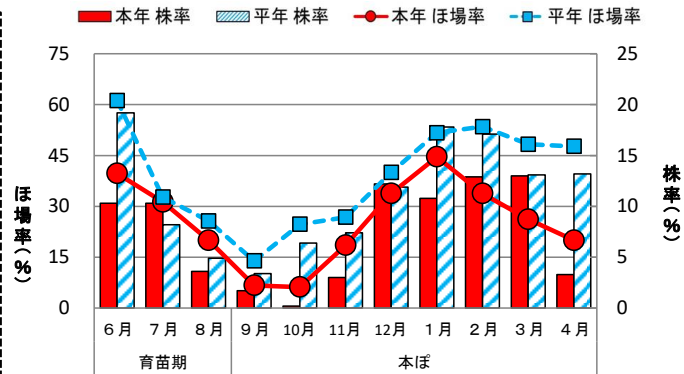


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

<発生状況>

本ぼでは9月から12月に一部ほ場で発生が見られましたが、全体的に少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

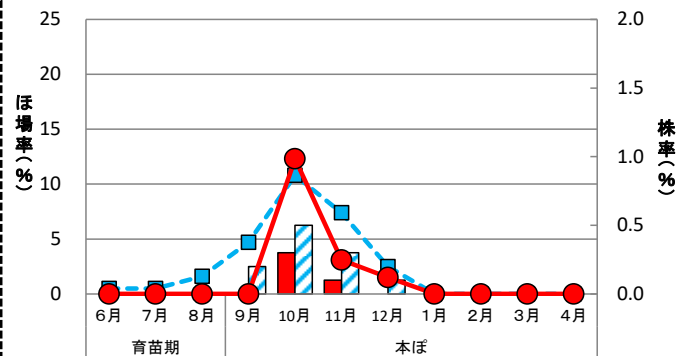


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。3月は平年よりやや多い発生でしたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

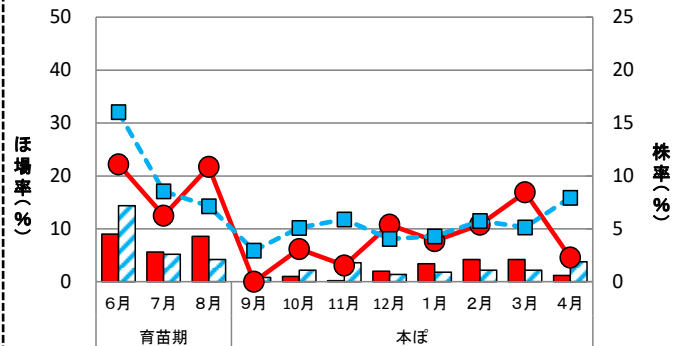


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

<発生状況>

11月から発生が見られ、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

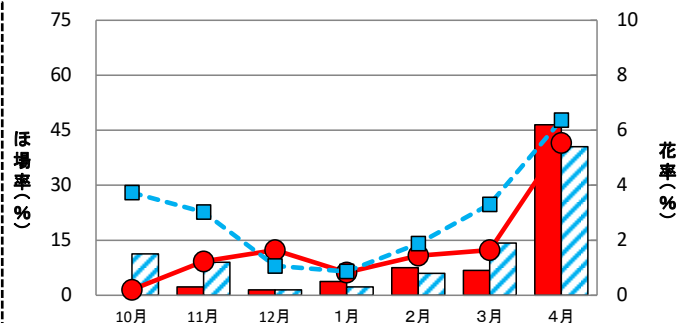


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病害虫防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぽを出入りする時期です。本ぽの病害虫を親株に持ち込まないよう作業順番に注意しましょう。親株に病害虫の発生が認められたら速やかに防除し、育苗期の発生や次作の本ぽへの持込みを防止しましょう。

－ 炭疽病 －

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 主に、6月下旬から9月下旬にかけて発病しますが、高温の時期に特に発生しやすくなります。
2. 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りがないような株元かん水等を行いましょ
3. 発病株は見つけしだい取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を十分に行った後に処分しましょ
4. 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行いましょ

－ ハダニ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 本ぽで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ぽ作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。
2. 育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I:11B 収穫75日前まで）やアグリメック（I:6 親株育成期、育苗期）等を散布しましょ
3. 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
4. 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぎましょ。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布しましょ。

－ アブラムシ類 －

気温が高く、飛び込みが多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
2. 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぎましょ。
3. 発生初期から薬剤を散布しましょ。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょ。